



本号(号外)では、2018年に4ヶ月にわたって塾通信で連載してきた「学習アドバイス」の記事のまとめを掲載します。現(1月現在)受験生たちは、この学習を、2018年の年明けより粛々と行ってきました。自習室で彼らが真剣な表情をして取り組んでいる光景に圧倒された人も多いのではないのでしょうか。次は、君たちの番です。ここに、まとめ記事(コピペ)をお出しします。是非熟読ください。

■ 学習アドバイス① (5月号掲載)

「詰め込み」

「学習の基本は、詰め込みである——」

ドラゴン桜で、数学の教師がそう言っていました。

しかし、「詰め込みの弊害」だとか「詰め込みでは点につながらないから本質的な理解を重点に置くべきだ」

——いずれも、どこかで聞いたことがあると思います。そこで、本号では、「詰め込み」を是とした結論ありきで、正しい詰め込み、力のつく詰め込みについてアドバイスをしてみたいと思います。

第1条 詰め込みとは反復演習のことである。

「詰め込み弊害論」の本当の趣旨は、短期記憶・一夜漬けの弊害にあると解されます。つまり、例えば試験2週間前に詰め込む、直前だけ焦って詰め込む……そういうことだろうと思います。

ええ、「害」とまでは言いませんけれども、受験の結果という意味においてはあまり意味があることではないと思います。ここでいう(少なくとも西荻塾においては)詰め込みとは、徹底した反復演習のことです。

例えば、野球のバッティングでも、バスケのシュートでも、自転車に乗ることでさえ、反復が基本ですよ。当たり前のことです。理論的な説明は不要、君たちの体がよく分かっている通りで、これは学習においてもしかりであります。

試験前2週間の詰め込みの内容が反復された試しはありますか——?

「ない」のが真実ではないでしょうか。もし、その詰め込みをしたあとに、試験が突然台風が来て1週間後に伸びたら、同じ詰め込みを繰り返すことになると思います。しかし、多分(真面目に詰め込めば)1週間で仕方なく繰り返すとおそらく2週間で詰め込んだ内容がかなり早く終わることになるでしょう。

人間というものは、間髪を入れず繰り返されたものを優先的に学習する素質が備わっています。これは、スポーツもそうですが、幼少期から生きるための作法をはじめとして本能というべき素質です。繰り返していくことで脳細胞間のつながりを強くし、身につけたものを忘れにくくする。

最初はつらいと思います。しかし、反復するたびにどんどん繰り返すに必要時間は短くなっていきます(反復するたびにつらかったら生きる気力を失うと思いませんか)。

この本能的な素質に訴えかける学習こそが、本当の詰め込みであります。大学受験においては少なくとも、手垢にまみれたところがかなりの割合です。いや、それは例えば、いわゆる難関国家資格試験(司法試験、公認会計士試験、医師国家試験等……)においてもそうです。現場でなにか新しいことをひねり出すことは要求されていません。それよりも、徹底して反復し鍛えていくことで物量に耐える力がまず試されているといっても過言ではありません。

第2条 1周目は、できる限り早く終えなければならぬ。

大事なことです。例えば、社会や理科の1問1答が1000問あるとしましょう(単語でもいいです)。これを1周するために、1日1問は論外として、1日10問=100日分という計画は合理的か、という話です。

西荻塾としての答えは、1日最低100問。できれば200問。300問が

望ましい。とにかく、1週間以内に終わらせるのが望ましいと考えています。1周した、という達成感を短期で得ることはすごくモチベーションになりますし、そもそも論として、100日間、1日もサボらずにやる人って見たことありますか?あと、50日くらいして、初日や10日目のものを覚えている自信、ありますか?(私には無理です)

記憶が残っているうちに、2周目に入ることが極めて重要です。どうも、100日間というスパンは極めて不合理な気がします。第1条で言ったとおりですが、反復の回数が増えるほうが定着は強くなる。

それなのに、1周目に時間をかけすぎてしまっただけで、2周目になってもまた1周目に近いエネルギーを使うこととなります。「こんな問いあったか?」ということになってしまいそうです。こうなると、反復のモチベーションは「激下がり」です。

早めに3周目に入れば、そこからは問いをふるいにかけることもできます。つまり、3周目でもできる問いは、塗りつぶしていけばよい。それはもう、大丈夫の証。残った問いだけを4周、5周。どんどん周回の時間が短くなっていきながら、苦手な問いも克服できる。

経験上、800問くらいの英文法の問題集は10日で4周はできます。

★詰め込みはつらいと思います。しかし、これがまず学習の基本です。信じてやってみませんか?(次執筆担当時に続く)

★数学でもしかりです。何を繰り返せばいいか、どうぞ聞いて下さい。

■ 学習アドバイス② (6月号掲載)

「自分流まとめノート」のあり方

よく、まとめノートを作っている人を見かけます。暗記カードやその類のものも含んで、以下「まとめノート」ということにします。

ノート作り的一生懸命になって、勉強した気になるという批判は根強くありますが、これも前回の詰め込みと同様に、やり方一つ。一概にその批判はあたらないと思います。今回は、「まとめノート」は合格の必需品である、という結論ありきで、その効果的な作り方・あり方について考えてみたいと思います。

第1条 まとめノートとは、自分の理解の軌跡である。

確かに、ただ参考書を書き写すだけの書写的な「まとめノート」、とにかく美しい製品を作るかのような「まとめノート」ってあります。まさに、ノート作りのためのノート作りは、いわゆる自己目的化そのものであり、弊害は大きいでしょう。

しかし、実際に難関大学に合格した人の実例(西荻塾の塾生、先生も含む)をひもとくと、全科目とは言わないまでも、「まとめノート」を確かに作って合格しています。

例えば、ある先生の例をひもとくと、有機化学の「まとめノート」がありました。ベースは、浪人時に一から有機化学をやり直すにあたって、それを学習し直しながら作ったノートのようです。これをみなさんに当てはめるなら、「授業ノート」のようなものがベースですね。

しかし、ただの授業ノートにあらす。先生や参考書のいうことをただ単に写したものでは明らかにありませんでした。内容の大きな筋道は、授業がベースになっているようですが、その後復習の過程で再度理解し直したり、練習問題を解きながら理解につなげた過程がその都度メモとして加筆されていました。たったの1冊でしたが、復習や演習のたびに加筆がなされ(「こことても大事!」「もう一回!」「どうした自分!」みたいなコメントもあり)、最後は「それのみ」で有機化学の体系が完成されていました。もちろん、自己流なので、それを他者が利用してもあまり意味は無いかもしれませんが、それでも、「自分にとって有機化学とはそれに尽きる」、そういうノートでした。

チェーザレ・パヴェーゼは「日記」の本質を、自己に執着することのフェティシズムと捉えたようです。自己に執着するとは語弊があります

が、「絶えず自己にまつわる記憶を喚起し、それを想像力に結びつけて、存在の感覚を確認する」という点に求めました。つまり、日記の本当の目的は、毎日つけるだけという単なる自己集積フェティシズム（取集癖）ではなく、**繰り返し読み、加筆することで自らの考えを洗練させていく**執着と捉えたようです。

これが、まとめノートにもいえると思います。すなわち、本質的な理解を前提にそれぞれの科目と向き合うこととなると思いますが、その**理解とは、ただの1度で終わるものではなく、繰り返し同じことでも理解を重ねることでそれは強固になり、より洗練されていく**であろうと思います。ときには、「ああ！そうか！」「エウレカ！（アルキメデスの逸話）」という瞬間もあると思います。その**体験を綴っておく**ことです。人は忘れる生き物ですが、書きとめて、繰り返し取り出して利用する。中身を加える。そうやって、ノートとともにあなたの脳内で確かな理解が確立していくと思われまふ。

わかりにくい例かもしれませんが、使いこめば味の出る革製品やペルシャ絨毯、ぬか床や「くきや」液など、使い込むことで味の出るものと一緒に人間は文明社会を築き上げてきました（？）。

まとめノートこそ、試験当日に持って行くべきものです。何冊もの参考書ではありません。自分で、こつこつとその**理解の軌跡を書きまとめ**ていったその数冊でよく、しかも、1時間もあれば全体をまわせるもの、そしてそれがまさに**試験で問われる**のです。

ただひたすらに弱点をまとめ尽くしたものでよい、解けなかった数学の問題をかき集めたものでよい、どうしても覚えられない単語や用語のまとめでもよい、加除訂正を頻繁に行って使い込みながら、常に自分の右に置く、まとめノートは、かならず糧となることでしよう。

第2条 3日坊主にならないためには、先人に倣え。

とはいえ、どう作るか、どのようなものがよいか、どの科目がよいか…いろいろな悩みは出てくることでしよう。

どうぞ、ここでまとめるのはスペース的にも難しいので、相談して下さい。詰め込みの軌跡をまとめてもよいと思いますし、実は、参考書をベースに書き込みを不断に行うことでもそれは立派なまとめノートになります。先生に恵まれて、その先生が配付したまとめのプリントがそのベースになることもあるようです。

塾にも、先生たちでこれまで集積してきたまとめノート集が、あります。書き殴ってあったり、自分を鼓舞するコメントが書き込まれていたり、なかなか他人に見せるのは恥ずかしいものもありますが・・・昨今は市販の「教科書ノート」をベースにしても、なかなかいいものが作れそうです。科目によっても性質上、まとめノートの作り方は様々だとも思いますが、是非、塾でその相談をしてみてください。

■ 学習アドバイス③（7月号掲載）

「二度目で解けなければ恥と思え」英語編

高3 合宿第一陣2日目の夜。食後の自習時間が終わり、翌日に備えて講師の先生たちと打ち合わせをした後に雑談をしている中で、先生たちが受験生であったときの自らの学習体験を聞く場面がありました。

出身も異なれば文系・理系も違う先生たちから、自らが目指す大学に合格するためにどんなことをどんな風に学習してきたのか、いろいろな話が飛び交う中で、「復習」の仕方にテーマが移ります。数学、社会、理科と各先生たちがそれぞれの体験を語る中、一人の先生がふと漏らした一言が表題のコメントでした。

この一言に全ての先生たちが深く同意を示しました。勉強の仕方はそれぞれ。しかし、試験日当日までに限られた時間の中で、合格ラインを越える力をつけるために、いわば学習の「心構え」ひとつと言えるものは、この一言に集約されるでしょう。今回はこの一言から考えてみたいと思います。

●明確な目標をもってそれクリアする意識を持つ

今回は英語に引きつけて話をしてみようと思います。

英語の学習において、重要な復習の一つは長文の読み直しです。身につけた知識を手際よく使いこなす練習として、新しい問題に取り組むのはもちろん大切ですが、自分が正確に読み切れなかった文章を読み直す

ことは弱点の補強に直結します。

では、どこに力点を置いて読み直すときよいか。例えば、比較的多くの学習者が苦手とするものの一つは、第5文型（SVOC）の文章の意味の把握です。文法解説書に出てくるような短文なら問題ないでしょうが、読解問題では20語で一文となっているケースも珍しくありません。

この構文で引っかかるのはOとCの語句のかたまりの判別です。まずはこの判別が一読した瞬間に捉えられるようにできることが不可欠です。しかしそれで終わりではありません。次の目標はかたまりを即座に判断した上で、日本語の大意が頭に浮かぶこと。そして最終的には、それを英語の語順のまま（しかも単語を日本語に訳し直さずに）意味を把握することまでできるようにすること。ここまでできれば「身についた」と判断できます。

大切なのは、漫然と単語を日本語に置き換えればよいのではなく、文の型を把握することに意識をおき、最終的に英語の語順のまま理解する事を目標にすることです。

そして、この流れを、最初に解いたときの見直しの後、時間をおいて読み直した二度目は必ずできるようにする。できなければ「恥だと思え」う気概をもってこれにあたってほしいのです。

●新しい課題を見つけて、学習の効率化を図る

こうした復習は最初はしんどいのは間違いありませんが、やり続ける中で自分の課題が明確になるはず。先ほどの第5文型（SVOC）話をもう少し続けると、この構文の把握がなかなかうまくいかない場合、そこには別の問題が潜んでいると見るべきです。まずは、単純に語彙が少ないことが問題だろうと思います。これは単語帳を使うなりして補うしかない（長文の読み直しでも可能です）。それでもうまくいかない場合は、単語の意味だけにとらわれて品詞（動詞・名詞等の区別）の意識が弱いのかも知れません。さらには、品詞を理解していても、例えば、ある動詞がどのように形を後ろに引き連れてくるのかを知らないからかも知れません。

こうした積み重ねの中で、「自分は構文が見えないのではなく、動詞の形を覚えることが課題だ」といった気づきが出てきます。こうして新たな課題を見いだすことができれば、次に何を意識して学習すべきかが見えてきます。そしてこのことが学習の効率化につながり、自らのレベルを上げて行くことにつながります。

そして、そのサイクルができあがってくる過程で、解き直しがうまくいかなかった時、悔しさが自然と湧き上がってくるようになるはず。それは、

■ 学習アドバイス④（8月号掲載）

「問題演習の取り組み方について」

皆さんにとって、問題演習とは何でしょうか。高1・2生であれば、例えば、試験前にその対策のための教科書傍用問題集を解く、復習プリントを解く、問題集を解く、そのあたりでしょうか。高3・卒生にとっては、この時期はまさに「入試演習」ということで各大学の過去問を解く、ということが第一となるでしょう。その問題演習の取り組み方について、本号ではお送りします（バックナンバーご覧ください）。

1. 問題演習なくして授業の意味なし

まず、口を酸っぱくして、とりわけ高1・2の諸君に言いたいことは、問題演習なくして学習はままならない、ということになります。授業で新たなことを学ぶ意義は、それはもう種々のものがあり、大変高尚なものもあるに違いありませんが、それはさておき、それが自分の成長につながっているかという点の確認は…「授業で学んだことについて試験（定期、模試、何でも）で点が取れる」こと。これが一番誰もが納得し、幸せになれるものではないでしょうか。

大目標が、試験問題を解く（頭の中を出力し、評価をもらう）ということであれば、問題演習を通じてその出力方法を学ぶ以外、方法はありせん。問題を解かない学習は無為に帰します。試験

前などに、「問題集が終わっていない」とか「その科目は問題集がありません」とか言われることがあります。青ざめます。どうか、塾で受講している科目以外でも、今一度問題演習がおざなりになっていないか、ご確認下さい。

2. 演習のゴールは「3回目の正直」

前号では、「同じ間違いをしたら、恥と思え」(英語編)という形でアドバイスをお送りしましたが、これは全科目について言えることです。

先に言っておきますが、人間ですから、忘れることもあるし、解説を読んでもよく分からないことも多々あると思います。それをなんとかしろというわけではありません。ましてや、入試演習として過去問に取り組んでいる高3・卒生にとっては、満点などほとんどあり得ないわけで(数学はたまにいますが)、常にそういう自分の人間らしさと向き合うことを要求され、その中で不安と戦い続けていることでしょう。

しかし、その自分の演習の成果と真剣に向き合うことはできます。問題演習の後に、誤答があれば、初回でしっかりその原因を探る。覚えなければならぬことは覚える。気になることがあったら、考える。それでもうまくいかなければ聞いてみる。そして、マーキングをして、復習に備える。よく「復習」を「演習の採点」だと思っている人がいますが、それは誤りです。「演習の採点と上記マーキングまで」が、初回の演習です。その後は(前々号までお伝えした復習のあり方について述べたとおりですが)「復習」のプロセスに入ります。

そして、2度目の復習でも、同じようにつまづいてしまうようなら、「悔いて恥じるべき」、すなわち、いかに初回演習のやり込みがまずかったかと己の不完全さと向かい合うことが必要です。いや、もしくは、一生懸命やった初回演習のやり方にまずいところがあったかもしれない。その場合は誰かにアドバイスを求める必要もあるでしょう。いずれにせよ、謙虚にその復習の結果と向き合うこと。

そして、3度目の復習(復讐、リベンジ)の機会でもモノにする。

この一連のプロセスを経て、問題演習は終了となります。

いいですか、解かないのは論外、解きっぱなしは最悪。

「二度目の復習で悔いるは恥」だが、「役に立つ」。悔いて恥じることがないことは人間ですから、あり得ません。しかし、それと向き合いながら、人は成長していきます。二度目の復習までいたっていない人はもちろんですが、どうか、そのような意識をもって演習に取り組まれないと思います。

→授業内演習で「三度目の正直」がおきない場合には、要指導です。

※繰り返しですが、アドバイス、いつでも塾までお求め下さい。

2019年も折に触れて続編が出ます！